

すべての子ども達が「分かる」「できる」授業の探求 ～「多様な性・生き方」の学びから自他尊重の関わりを築く～

本村めぐみ（研究代表：和歌山大学）

向井直樹（和歌山大学附属特別支援学校）、土井一真（和歌山県立熊野高等学校）

鶴岡尚子（東京医療保健大学和歌山看護学部／元・和歌山大学附属特別支援学校）

1. はじめに

本研究は2021年度からの継続研究であり、3年目を迎える。本研究の一貫した目的は「ダイバーシティ&インクルージョン教育」の理念を実現するための授業づくりである。本年度は、より具体的な授業実践に向けてさらなる探求を進めることを目指した。

本研究が探求する授業のねらいとは、第一に、すべての学び手が「多様な性・生き方」を自己経験と接合させながら深く理解できる（分かるようになる）ことである。第二に、「多様な性・生き方」への理解を伴いながら、自身が内面化してきた価値観を問い直し、自己洞察を深められるようになることである。第三に、誰もが持つ「自分らしさ」を阻害することなく、自他尊重の関わりをいかに築き合うことが可能であるかを自ら考え、日常生活において実行に移すことができるようになることを、最上位のねらいに定めた。

本年度は、軽度知的障害を持つ和歌山大学附属特別支援学校・高等部の生徒たちを対象とした授業実践を3部構成によって展開した。知的障害のある子どもたちに「多様な性・生き方の学び」の機会を最大限に保障することの意義とは『**誰もが他者とは異なる個性や価値観を持っており、自分らしさを守る権利がある**』『**ある人の個性や生き方が社会の大多数と違っていても、それを理由に社会的に排除されてはならない**』という高い人権意識を涵養し、これからの人生を歩む生徒たちを強くエンパワーメントすることである。

2. 方法

2-1 教科「セルフデザイン」の特徴

本授業実践は、附属特別支援学校において2011年より開設された「セルフデザイン」という教科の中で行った。この授業は、生徒たちが互いに関わりあうことを重視し、悩みや課題を共有できるようになることを基盤に、共に課題に向き合い、自他の価値観を認め合っていくこと、自己理解を深め、将来に向けて自己実現を図っていくことができるように指導内容が設定されている（武田・北岡他,2022）。「多様な性・生き方」の学びにおけるねらいは、この教科が目指す内容との整合性が極めて高いことは言うまでもない。

2-2 授業実施時期と対象者

授業実践の期間は、2023年12月～2024年1月である。本授業の学び手は、軽度知的障害をもつ高等部生徒5名である（女子3名、男子2名）。生徒たちは中学生までは公立学校に通学した経緯を持ち、高校から特別支援学校へと進路の舵を切った意思決定には、生徒のみならず保護者も含めて、現在もなお葛藤を抱く様子が観察された。本授業実践においては自己肯定感を支え、将来を見据えた自己成長のための視座を持ち得るようになることを重点課題とみなした。

2-3 授業の構成と流れ

授業実践では徹底して「具体」から「抽象的概念」の学びへという進行を意識した。

第1部から第2部では『ジェンダーの学びを通して自分らしさについて考えてみよう』とのテーマを設定した。第1部では、生徒たちと年齢が近い姉弟が登場する物語から提示した。姉弟は、各々に望ましい個性を持っているが、周囲の大人から「女らしくない姉と男らしくない弟の性格が反対であればよかったのに」と言及される。生徒たちには、姉弟の気持ちを想像し、自己経験も投影させつつ、対話的活動を丁寧に促した。「男らしさや女らしさ」を強要される姉弟に対する生徒たちの共感性と接合させながら「ジェンダー」「ジェンダーバイアス」などの抽象概念の理解にも及ぶように工夫した。

第2部では、人々のジェンダー意識が時代や社会と共に変動することが理解できるように、内閣府調査(2019)による「性別役割分業意識への賛否の割合」を具体的に示した。「ジェンダーバイアス」は根拠のない人々の思い込みによって生じることから、生徒たちに向けて「皆も、自分自身に対する思い込みによって苦しくなってしまうことはない？」との問いによって自己洞察を促すことを目指した。最終ワークでは、身近な学校や家庭において見聞きする言説(人々のことばの束)のなかにジェンダーバイアスが含まれてるかどうか、それぞれの考えを伝え合った。

以上の学びを経た第3部では『「いろいろな性のありかた」の学びから多様な人たちと一緒に築く関わりを考えよう』と題し、まずは色々な人々が笑顔を湛えて映る2枚の写真を提示し「この人たちはどのような関係だろう?」「この人たちからはどのような印象を持つ?」といった問いかけに自由に対話を繰り広げた。その後、写真に登場する人たちの一組は、男性同士のカップルと共に暮らす母親から成る「家族」である事実を、二組めは「男性のように女性のようにも両方の印象がある人達」が、割り当てられた性とは異なる性で生きるトランスジェンダーである事実を明かし、この社会に実存することを伝えた。

後半からは、「人間は男性か女性のいずれかであるって本当?(性別二元論)」との問いかけと共に、多様な性を捉える基礎知識を専門用語は多用せずに説明を加え、日本の性的マイノリティの割合(約1割)を自分たちの学校規模に置き換えると「ごく身近な存在」である認識へと導くこととした。

2-4 成果測定のための方法

本研究においては、授業実践の成果を数量的に把握することを試みた。生徒たちの授業前後における「性差別意識」の変化を測定できるように、吉岡(2017)による「日本語版・好意的性差別意識」の尺度項目に依拠しながら、生徒たちが理解可能な文言に整え、独自の項目を設定した(表1、表2)。具体的には「ジェンダー差異」「異性愛重視」「父性主義/母性主義」の3要素に加えて「性の多様性への否定」項目4つを加えた全12項目について、生徒たちに4件法によって授業前後に回答を求め、スコアの変動を把握した。

量的な成果測定に加え、今後は、生徒一人一人を対象に授業成果を把握するための質的なインタビュー調査を構想中である。調査の概念コードとしては「授業を通して得られた新たな知識や価値観」「授業前後で変化した身近な人々に対する見方、関わり方」「今後、新たに出会う可能性のある様々な人たちと、どのように関わり合っていきたいか」を予定している。

3. 結果と考察

以上のように構想して展開した授業実践の成果の一部を「性差別意識」の尺度項目を用いて数量的に把握できた結果を示したものが表1（女子の結果）と表2（男子の結果）である。「性差別意識」を男子、女子ともに「ジェンダー差異」「異性愛重視」「父性主義／母性主義」「性の多様性への否定」の4要素から構成される12項目で測定した。

スコアは「強くそう思う（4点）」「そう思う（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「全くそう思わない（1点）」としてカウントした。また、「わからない」という回答は、便宜上ではあるが、「思う」と「思わない」の中間に位置すると判定し（2.5点）を付与した。トータルスコアは低くなるほど「性差別意識」が弱まると解釈される。

結果として、5人すべての生徒において授業前よりも授業後においてトータルスコアが減少したこと明らかとなった。最も変化が観られたのは生徒B（女子）であり、授業前後のスコア差異は8.5ポイントであった。続いて、生徒E（男子）の授業前後に観るスコア差異が6.5ポイントと相対的に大きく減じられていることが分かった。

生徒Bは授業前には特に項目4,5に象徴されるような「父性主義」に共感的であったが、授業後にはそれらの考えが大きく緩和される方向に変化が観られた。また、生徒Eにおいては授業前には「性の多様性への否定」項目を除き、ほとんどの項目について完全な否定をせず「あまりそう思わない」と中庸な回答をする傾向が観られた。しかし、授業後には、すべての項目に対して「全くそう思わない」と自信を持って回答するようになった様子が観察されたことは注目に値する。

スコア幅の変動が最小であった生徒D（女子）は、項目7,8に象徴されるような「異性愛重視」について、授業前は「全くそう思わない」という強い非共感性を示していたが、授業後は「あまりそう思わない」に変化した。これには、授業を通して「恋愛感情の有無は人それぞれ」という認識に至ったことにより、自身の考えを少し相対化させる視座が生じた可能性も考えられる。自分の考えの絶対視を控えるようになった変化も、スコア幅の変動のみに依らない授業成果の一端と考えられる。

さらに、本授業実践の対象となった生徒たちの結果を相対的に捉えるために、研究代表者の本村が、大学で実施する1年生を中心に開講する授業（SOGIEを考える）の履修者（女性5名、男性5名）に同じアンケート調査への回答を求めたところ、興味深い結果が生じた。授業直後に回答された高等部生徒たちのトータルスコアの平均値よりも、大学生10名によるトータルスコアの平均値のほうが際立って高く出現したのである。要するに、大学生と比較しても、高等部生徒たちの方が本研究による授業実践によって伝統的で固定的なジェンダー観の拘束から解き放たれ、性の多様性への理解も深まったと解釈される。

具体的なトータルスコアの平均値は「大学女性（22.9）>大学男性（19.5）>高校女子（17.8）>高校男子（13.5）」という差異があり、大学女性が最も高い平均値を、高校男子が最も低い平均値を示すという結果となった。この結果が生じた背景として、大学1年生は、社会の理想と現実のギャップに気づきを得る発達段階にあり、一方、高等部生徒たちが「教えられたことを真っすぐ素直に受け止める」傾向を鑑みる必要はあると思われる。しかし、少なくとも本授業がねらいとした「互いの個性を尊重しながら他者との関わりを築く」うえで、個人を拘束する固定的なものの見方・考え方を退けることができるようになった点は一定の成果であると評価できると考察された。

表1 女子（生徒B、C、D）にみる事前・事後アンケート調査の結果

「性差別意識」項目	調査対象者（上が事前調査、下が事後調査の結果）			
	生徒B	生徒C	生徒D	
1. 夫婦が共働きであっても、家庭のなかでは、妻が夫の世話をするのが当然だ	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	
2. 女性のために沢山のお金を稼いでくれる男性が好ましい(好きだ)	そう思う(3) 全くそう思わない(1)	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	あまりそう思わない(2) あまりそう思わない(2)	
3. 男性は一人では身の回りの世話はできないので、女性が家庭で男性の面倒をみてあげるべきだ	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	
4. 災害など危険なことが起きた時は、女性より男性のほうが落ち着いてリーダーシップが取れる	強くそう思う(4) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	そう思う(3) そう思う(3)	
5. 男性は女性よりも、危ない役目であっても進んで行おうとする	強くそう思う(4) わからない(2.5)	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	わからない(2.5) 全くそう思わない(1)	
6. どんな女性も、自分を大切にしてくれる男性を必要としている	そう思う(3) 強くそう思う(4)	あまりそう思わない(2) わからない(2.5)	そう思う(3) あまりそう思わない(2)	
7. どんな女性も、深く愛する男性がいるはずだ	強くそう思う(4) 強くそう思う(4)	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) あまりそう思わない(2)	
8. すべての女性にとって完璧な幸福とは、男性から愛され続けることである	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	あまりそう思わない(2) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) あまりそう思わない(2)	
9. 男性同士が恋愛するのは、おかしい	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	あまりそう思わない(2) あまりそう思わない(2)	
10. 女性同士が恋愛するのは、おかしい	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	あまりそう思わない(2) あまりそう思わない(2)	
11. 男性として生まれたが、「本当の自分は男性でない」と思うことは、おかしい	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	
12. 女性として生まれたが、「本当の自分は女性でない」と思うことは、おかしい	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	全くそう思わない(1) 全くそう思わない(1)	
トータルスコア/事前事後のスコアの差異	事前：28.0 事後：19.5	事前：17.0 事後：13.5	事前：21.5 事後：20.0	事前：17.5 事後：15.5

注) トータルスコアの最大値（全項目に「強くそう思う」と回答の場合）は48点、最小値（全項目に「全くそう思わない」と回答の場合）は12点と算出される。

表2 男子（生徒A、E）にみる事前・事後アンケート調査の結果

「性差別意識」項目	調査対象者（上が事前調査、下が事後調査の結果）	
	生徒A	生徒E
1.男性であれば、女性と恋愛できる人生が幸福だ	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（1）	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（1）
2.男性であれば誰かが、深く愛する女性を持つべきだ	わからない（2.5） あまりそう思わない（2）	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（1）
3.災害など危険なことが起きた場合は、男性よりも女性が先に助けられるべきだ	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（1）
4.男性は、女性を大事にして守ってあげるべきだ	そう思う（3） あまりそう思わない（2）	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（1）
5.男性は、女性のためにより多くのお金を稼いで、幸せにしてあげるべきだ	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（2）	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）
6.女性は、男性よりも、清らかで純粋なところを多く持っている	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	あまりそう思わない（2） 全くそう思わない（1）
7.女性は、男性よりも、困っている人に親切にするなど気配りができる	全くそう思わない（1） あまりそう思わない（2）	全くそう思わない（1） あまりそう思わない（2）
8.女性は、男性よりも、全体的にセンスがよくておしゃれだ	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）
9. 男性同士が恋愛するのは、おかしい	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）
10. 女性同士が恋愛するのは、おかしい	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）
11. 男性として生まれたが、「本当の自分は男性でない」と思うことは、おかしい	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）
12. 女性として生まれたが、「本当の自分は女性でない」と思うことは、おかしい	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）	全くそう思わない（1） 全くそう思わない（1）
トータルスコア／事前事後のスコアの差異		事前：18.0 事後：12.0 -6.5

注) トータルスコアの最大値（全項目に「強くそう思う」と回答の場合）は48点、最小値（全項目に「全くそう思わない」と回答の場合）は12点と算出される。

4. まとめと今後の課題

以下は、3回に渡る授業を中心的に担った向井教諭による「まとめ」である。

本学級の生徒5名は、年度当初は担任も代わり、生徒同士の関係も変化したことで、友達の発言に語気の強い返答や厳しい指摘をしたり、周りに配慮せず、身勝手に質問をし、話しかけたりする様子もあった。その後、学習や行事等の活動に取り組む中で、相手の気持ちを意識して自分の事を伝え合い、友だちの思いや良さに気づくことができつつある。

その中で、「男子たるもの」という考えを意識した発言や、「男子と友達でいるのは楽しいけど付き合うとかは考えられやんなあ」という発言など「ジェンダー」に関する考えの芽が見えてきた。2年後には社会人となる者が多い生徒たちに対して、ジェンダーや多様な性について学習する機会の必要性を感じ、それらの学びを通して「自分らしさ」について考える機会を共同研究者らと共に計画した。この学習を通じて、多様な人の考えや価値観があることを知り、自他共に自分らしく生きることの素晴らしさを伝えたいと考えた。

第1時は、具体的な姉弟の事例から男らしさ女らしさについて考えた。生徒の中には自分と似ている部分を投影し、自分ごととして考える様子が見られた。本時では、多数の人によって決められた性別のあり方がジェンダーバイアスを生むことや、ジェンダーに対する意識は個人によって異なることや、思い込みは危険であることに気づけた。

第2時は、ジェンダーに関する意識が時代ごとに変化してきた事実について資料を基に理解することができた。固定化されたジェンダー意識によって自分の考えや行動を制限せずに、自分らしい個性や生き方を肯定して良いということに気づけた様子であった。

第3時は、「いろいろな性のあり方」の学びから、多様な価値観の人々との関わりについて考えた。同性同士のカップルや、生まれた時とは違う性で自分らしく生きる人々の写真を観察し、自分らしく輝いて生きる様子を学んだ。生徒達はここまでの学びから、知識不足による間違っただけの思い込みが他者の考えや生き方を否定し、傷つけることに気づけており、自分も含めて誰もが自分らしく生きる権利があるという思いを持っていた。

今回の学習では、一つの資料を基に自由に発言できる環境を整えたことで、生徒は素直な言葉を出せていた。授業の学びをふりかえる際には「人によって生き方が違うことを知った」や「多様性は大切だな」などの発言が見られた。「自分も思い込んでいる事が多いと気づいた」「思い込みって危険だと感じた」など、自身の考えの変化を表現しても良いのだという安心感から出たと思われる発言もあった。これらの事から、本授業のねらいは一定達成できたと考える。性的少数者と言われる人が身近にいる事を知った生徒たちが、授業の学びを活かしてそうした人々に寄り添える人となることを願いつつ、今後もセルフデザインを中心に、生徒たちが互いに関わり合いながら、共に課題に向き合う機会を大切に育んでいきたい。

文献

- ・内閣府、「2019年度男女共同参画に関する世論調査」
- ・武田鉄郎・北岡大輔他（2022）軽度の知的障害や発達障害のある生徒の内面を重視した指導法に関する研究（令和2年度），和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書 2020 117-121, 2021-03-01, 和歌山大学クロスカル教育機構 教育・地域支援部門 / 和歌山大学 教育学部
- ・吉岡真梨子（2017）好意的性差別意識と性役割意識との関連：パターナリズム/マターナリズム・ジェンダー差異・異性愛重視の3要素に着目して，学習開発学研究 10 149-155, 2017-03-16, 広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座